2023年度 埼玉医科大学短期大学

学校推薦型選抜 A日程
小　論　文（看護学科）

無断転載・複製を禁ず

次の文章を読み、内容を150字以内に要約しなさい。また、この文章に対するあなたの意見を300字以内で述べなさい。

滑らかに進行する言葉のやりとりは、あたかも定石に沿って囲碁を打つように、すでに繰り返し踏み均(ならし)された会話の道筋を辿(たど)っている場合が多い。そして、その整備された道筋は、長く蓄積されたステレオタイプの温床でもある。また、たとえば政治家の討論会において当意即妙に思える受け答えがなされているように見えても、それは往々にして、周到に準備された想定問答や、古来錬成(れんせい)されてきたレトリックや雄弁術の賜物にほかならない。

そもそも、当意即妙さや流暢(りゅうちょう)さというものを、言語実践における美徳としてどこまで賞賛すべきなのか、私たちは一度問い直す必要があるだろう。昨今はテレビなどのマスメディアだけでなく、たとえばＳＮＳ上で展開される論争でも、次のような光景がよく見られる。すなわち、相手の主張や批判に対して瞬時に切り返す言葉が論破としてもてはやされ、相手がそれに対して間髪容(い)れずに反論しなければ、論破されたと判定される、という光景だ。しかし、後でそのやりとりをゆっくり辿ってみると、論破した側はたんに論点をずらして攻撃していただけであり、とても論争の名に値するものになっていなかった、ということも少なくない。そこでは、当意即妙の切り返しが示唆するところの（実情はどうであれ）頭の回転の速さや「地頭」なるものの良さが賞賛の対象となり、議論の内容という肝心のものが置き去りにされている。

また、これはテレビなどでお笑い芸人が見せる突っ込みに影響されているのだろうが、日常の会話やプレゼン、スピーチといった場で、誰かが言葉を噛(か)んだり言葉に詰まったりすると、「いま噛んだよね!」などと指摘され、笑いが起こるということが、いつの頃からかよく見られるようになった。噛んで何が悪いのだろうと思うのだが、これもまたひとつの「お約束」となってしまったようである。

ぺらぺらしゃべれることや、間髪容れずに話を切り返せることは、必ずしも美徳ではない。むしろ私たちは、秒単位のタイムスタンプが押された言葉がネット上を無数に流れ続けるこの時代だからこそ、言い淀(よど)む時間こそを大切にし、言葉をゆっくりと選び取りながら語る実践に意識的に向かうべきではないだろうか。ステレオタイプな言説によって多様な現実をぱっと一括(くく)りにして済ませたり、当意即妙な受け答えをすることそれ自体を目的とする実践よりも、現実の難しさや複雑さを受けとめた言葉を慎重に紡ごうとする実践の方を尊重すべきではないだろうか。

ただ、そうした実践には、どうしても時間と労力がかかるという特徴がある。ステレオタイプな言説に頼らずに別の言葉を探すのは、なかなか骨の折れる作業だ。現実をよく見ながら、「この言葉ではまだしっくりこない」、「この言葉では……過ぎる」と迷いつつ、しっくりくる言葉が訪れるのを待たなければならない。それゆえ、話を聞く方も待たなければならない。お約束通りでない生きた言葉が探され、交わされるには、話し手と聞き手双方の待つ努力が欠かせないのだ。

（古田　徹也『いつもの言葉を哲学する』より一部改変）

無断転載・複製を禁ず